

4.3 生物多様性

生物多様性とは、多くの種が生息する（種の多様性）ということだけではなく、それらが生息・生育することによって形成される生態系の多様性、同じ種であっても個性を未来へと引き継いでいく遺伝子の多様性を総合的に示すものです。鳥類の場合は、渡り鳥のように自ら大移動を行う種も多くいますが、アヒルなどのように家禽として飼われていたものや、ガビチョウなどのようにペットとして飼われていたものが逃げ出し、野生化して自然界へ広がっている例がみられます。このような国外外来種が生態的に優勢な場合、在来の生物種を圧迫したり、自然界では起こらない交雑によって、地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失をもたらしたりすることで、生態系へ様々な影響を与えることが懸念されています。国外外来種のうち外来生物法で特定外来生物に指定されているガビチョウ、ソウシチョウなどの確認状況について整理しました。

【生物多様性の攪乱：特定外来生物の確認状況】

(鳥類調査)

- ・ 国外外来種で特定外来生物に指定されているガビチョウを2河川、ソウシチョウを3河川で確認

国外外来種で特定外来生物に指定されているガビチョウ、カオジロガビチョウ、カオグロガビチョウ、ソウシチョウについて確認状況を整理しました。

ガビチョウは関東地方の荒川、九州地方の大分川、ソウシチョウは中国地方の千代川、太田川、九州地方の大分川で確認されました。

(資料掲載：4-23～24、4-37～38 ページ)

1～4巡目調査の確認河川数の比較

種類	1巡目調査 (81河川)	2巡目調査 (118河川)	3巡目調査 (122河川)	4巡目調査 (48河川)
ガビチョウ	1河川 〔1.2%〕	0河川 〔0.0%〕	8河川 〔6.6%〕	5河川 〔10.4%〕
カオジロガビチョウ	0河川 〔0.0%〕	0河川 〔0.0%〕	0河川 〔0.0%〕	2河川 〔4.2%〕
カオグロガビチョウ	0河川 〔0.0%〕	2河川 〔1.7%〕	1河川 〔0.8%〕	0河川 〔0.0%〕
ソウシチョウ	0河川 〔0.0%〕	1河川 〔0.8%〕	7河川 〔5.7%〕	6河川 〔12.5%〕

注1；確認河川数の比較は、直轄管理区間のデータを対象とした。

注2；1～3巡目調査のデータは対象全河川のうち、種名等について真正化され、河川環境管理システムに格納されている調査データを対象とした。

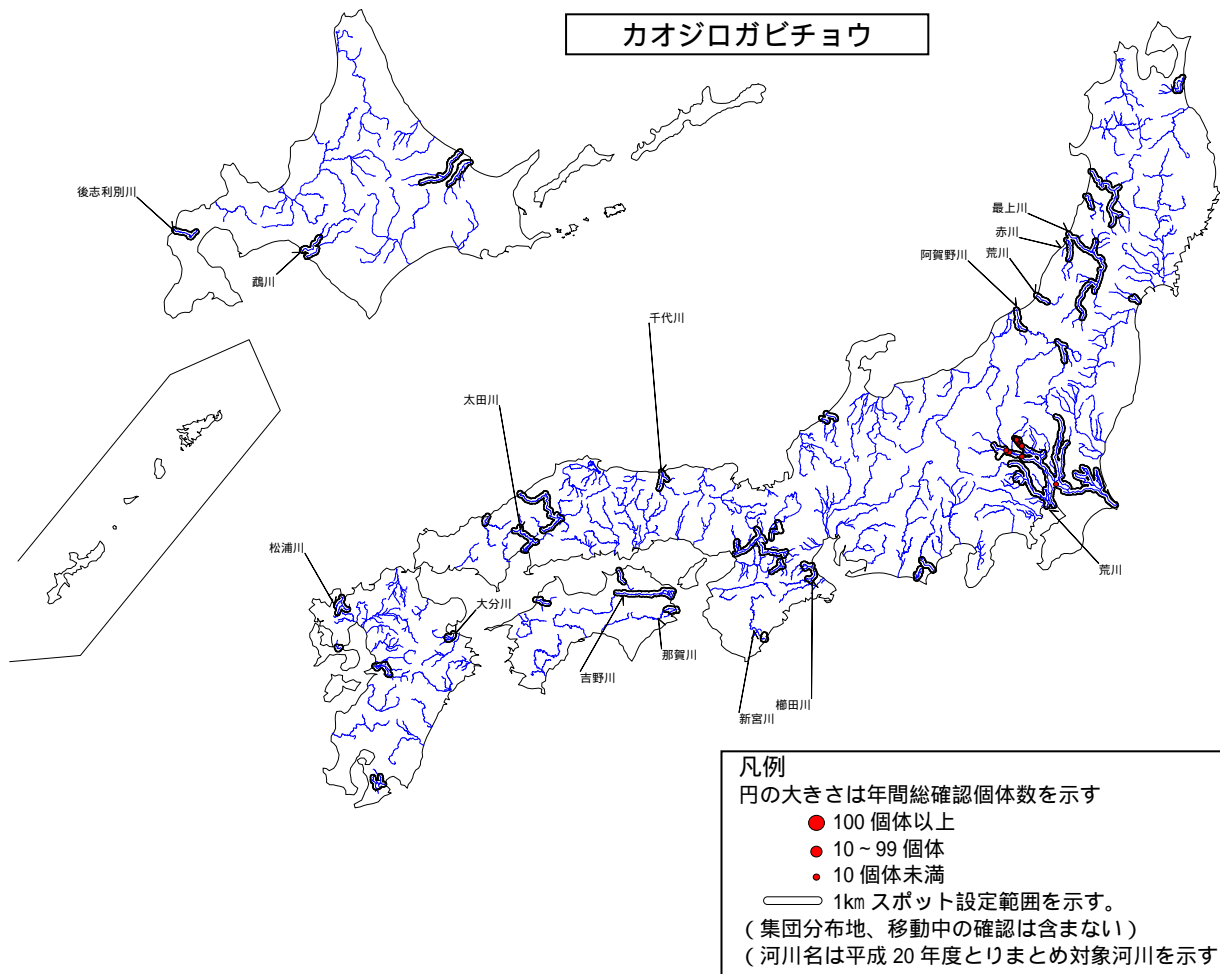
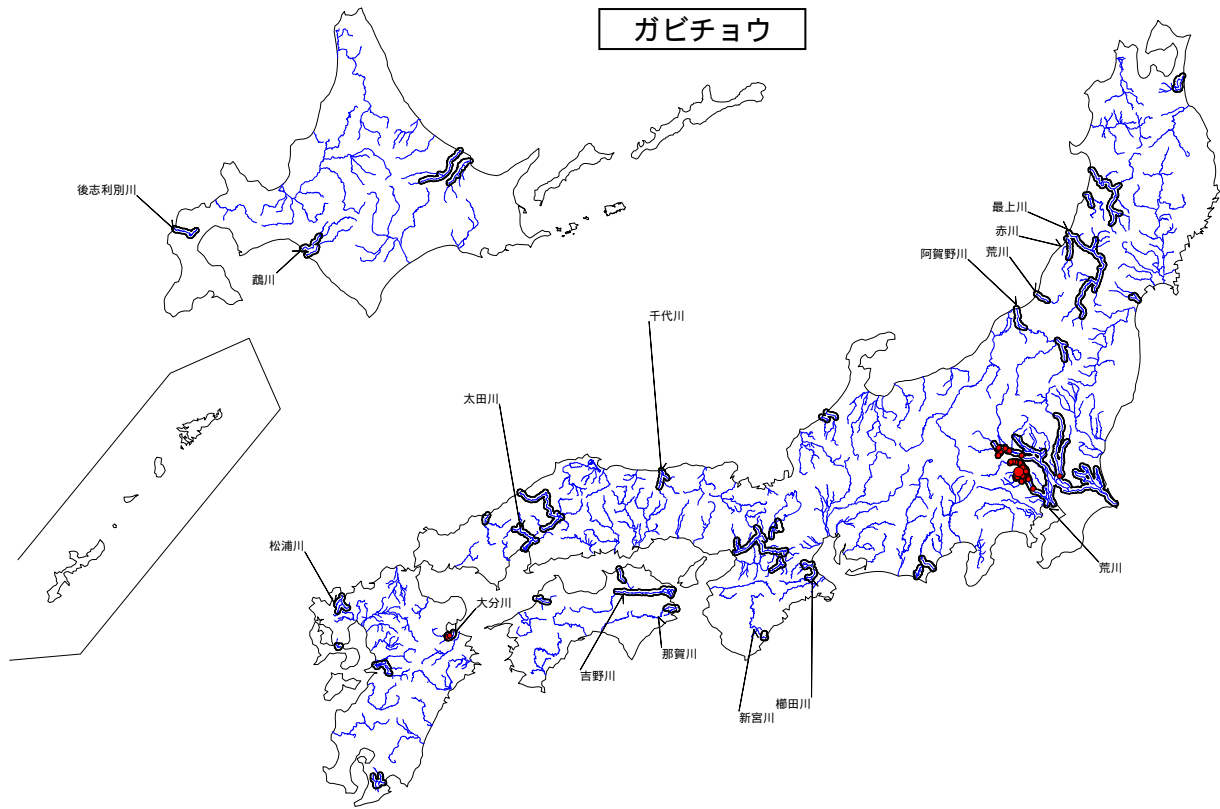
注3；()内は分析対象河川数を示す。

注4；〔 〕内は確認河川数の分析対象河川数に対する%を示す。

特定外来生物に指定されているガビチョウ、カオジロガビチョウ、カオグロガビチョウ、ソウシチョウは、いずれも東アジア、東南アジアを原産とする種ですが、主に鳴き声を楽しむためのペットとして輸入されていました。ソウシチョウも、東アジア、東南アジアを原産とする種で、観賞用のほか、伝統的な化粧品であるウグイスの糞の代用品として飼育されていたこともあります。いずれも飼育個体の逃亡ないしは故意の放出が、野外への定着の主因であるとされています。主に低地林に定住し、これらの種が優占しているところもみられ、長期的には在来種への直接・間接の負の影響も懸念されています。今回の調査で、ガビチョウは関東地方の

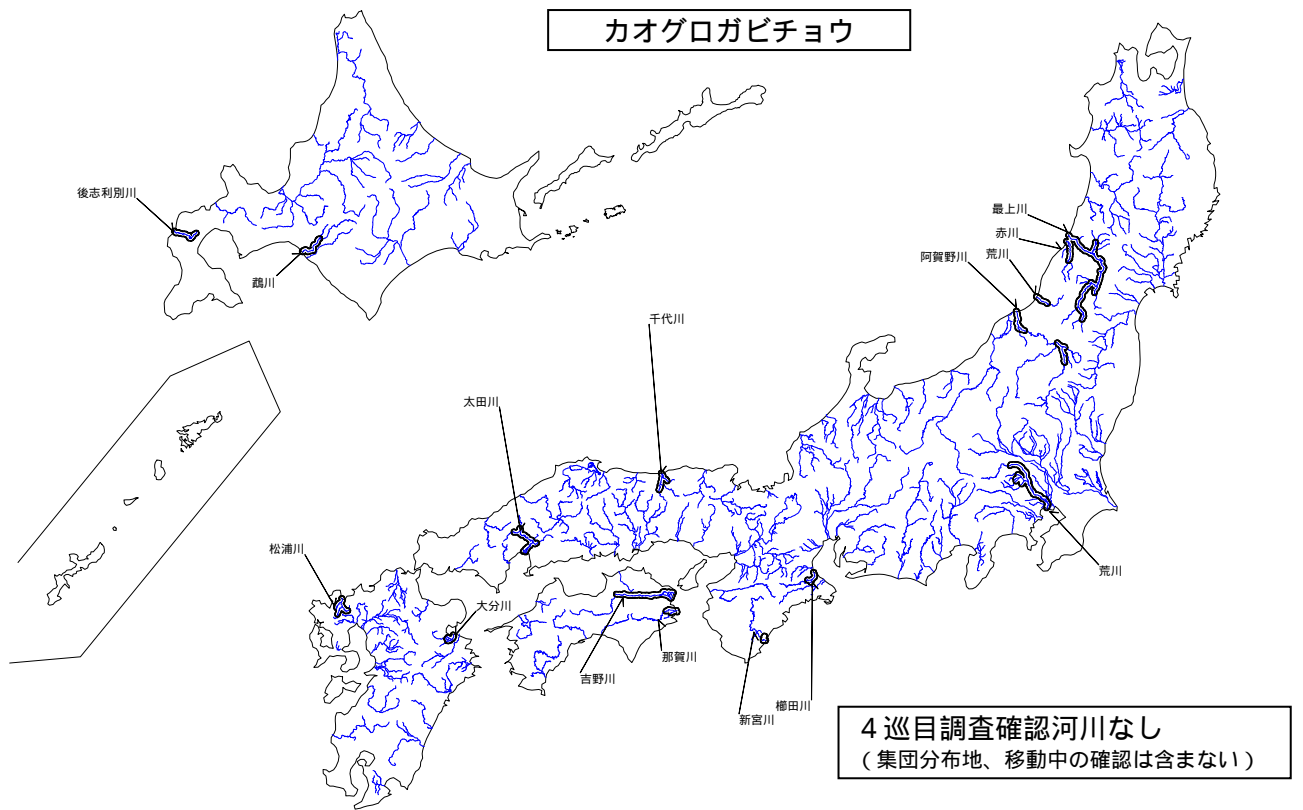
荒川、九州地方の大分川、ソウシチョウは中国地方の千代川、太田川、九州地方の大分川で確認されました。カオグロガビチョウ、カオジロガビチョウは確認されませんでした。

1～4巡目調査全体での確認状況を比較すると、1～3巡目調査までは未確認だったカオジロガビチョウが4巡目調査ではじめて確認されました。カオグロガビチョウは4巡目調査はまだ未確認でしたが、ガビチョウ、ソウシチョウとともに4巡目調査の確認河川数の比率が高くなっていました。

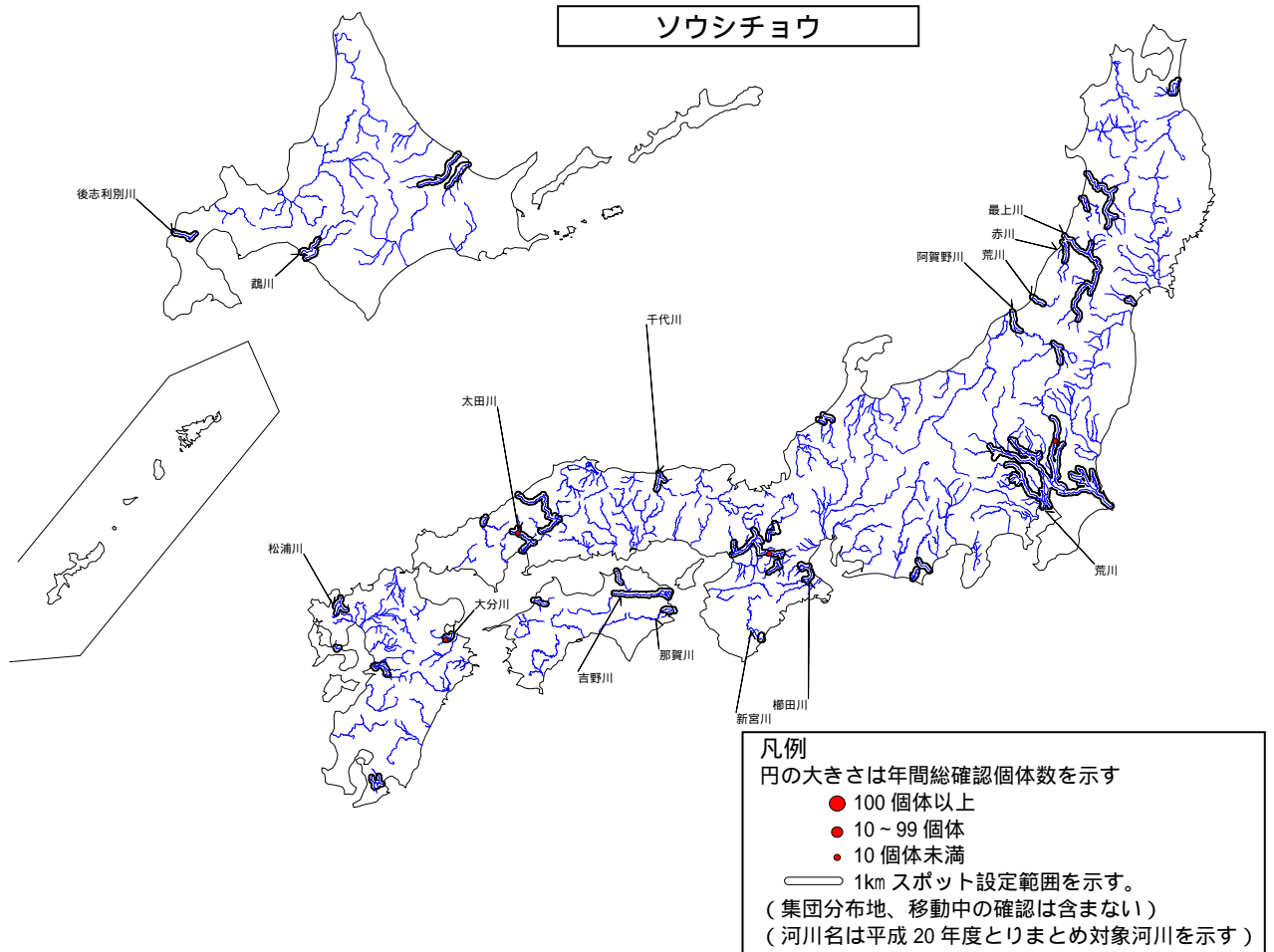


ガビチョウ・カオジロガビチョウの確認スポット (4 巡目調査)

カオグロガビチョウ



ソウシチョウ



カオグロガビチョウ・ソウシチョウの確認スポット (4 巡目調査)